IBDと就労

第6回　時には自分を解放してあげよう

中山泰男

なかやまやすお●1964年生

17歳でクローン病を発症。小腸機能障害1種1級。2001年に熊本IBDを設立。九州IBDフォーラム代表。熊本IBD会長。IBDネットワーク社会制度支援世話人主担当に就任し就労問題を中心に活動を行っている。現在は、養護老人ホームの施設長として勤務。趣味は、ツーリングと他県の患者会めぐり。熊本県難病団体連絡協議会事務局。日本難病・疾病団体協議会評議員。

いよいよ就職シーズンが到来する。新卒者にとっては、会社（職場）に対する不安と期待に胸が膨らむ時期である。いっぽうで就職内定率は7割以下と未だ超就職氷河期の中にあるとメディアは報じている。ただ、職業安定所のデータを見ると、企業からの求人数は減っていない。では何が起きているのだろうか？

最近の学生は、安定志向が強く、ネームバリューのある大企業などへの応募が集中したようだ。当然ながら倍率も上がり、内定が取れない若者が溢れた。普通ならここで方向転換し、中小企業へ応募するのだろうが、最初のつまずきで自分の全てを否定されたかのように感じてしまい、心を閉ざしてしまったのかもしれない。

職業安定所担当者の話では、親同伴による窓口への来所がかなり増えているとのこと。親御さんも子どもの積極性の足りなさにいても立ってもいられないのだろう。しかし、自分で選び納得した仕事でなければ継続性も怪しいもの。実際、多くのケースで仕事がうまく決まらないという。

そうなると、我らにチャンスがあるように感じてしまうのは私だけだろうか。中小企業は人手不足で喘いでいる。私の働く老人介護事業所では、本当に人手不足で苦労している。極端な言い方をすれば、面接を受ければ採用される状態で、うつ病患者、アスペルガー症候群、発達障害のある方々なども一緒に働いている。

もちろん個人差があり、時期や病態にも大いに関係することなので、一概には言えないことだが、仕事をする上でIBDを患っていることが大きなマイナスになるということはほとんどないのではないか、と私は思う。

ふと、今春大学を卒業する友人のK君（CD歴12年）のことを思い出した。私は、もともと彼のお父さんとの付き合いが長く、熊本IBDがようやく形になった頃に「実はうちの息子が……」と息子さんの悩みを涙ながらに打ち明けられた。その後、何度か「息子を中山さんに会わせたいんだ」とおっしゃるお父さんに「本人が会いたいと言うまで待ちましょう。必ずその時期はやってきますから」とお答えしてきた。何事もタイミングが大切であると思ったからである。

あれから8年、「息子が就職相談で中山さんに会いたいと言っている」とお父さんから電話を受け、ついにK君と会うこととなった。育ち盛りで思春期の食事制限という辛い体験を生かし、管理栄養士になりたいという彼の悩みは、病気を持ちながら働くことができるのか、はたして自分は社会人としてやっていけるのかという将来に対する強い不安だった。

その後、K君を我が家の宴会に招き一泊してもらった。患者会の豪傑メンバーと食卓を囲み、彼らの健康人以上の食べっぷりと飲みっぷりを目の当たりにし、相当ショックを受けたようだ。「今まで自分がやってきた厳しい食事制限は、いったい何だったのか」と愕然としたという。もちろんクローン病にとって食事制限は大切な治療である。しかし、時には自分を解放してあげることも重要なことなのだと思う。

そのK君が昨年末、IBD患者の交流会で、「自分の経験は自分の中に留めておくだけではなく、同じような状況の人を理解し、一緒に考えていける仕事をしていきます」と力強く宣言してくれたのだ。

精神的な影響ってとても大きいものだ。もうダメだと思ってしまえば全てを失ってしまうし、前向きになることができれば、輝かしい未来となる。